

西泊にしどまりく後世に伝える人間愛

一昨年から3年にわたって放送されているNHKスペシャルドラマ「坂の上の雲」。いよいよ、この年末クライマックスを迎えます。明治日本がその存亡をかけて戦った日露戦争。日本・ロシア両国海軍が勝敗を決すべく臨んだ、明治38（1905）年5月27日、対馬沖。**本日天気晴朗ナレドモ浪高シ**司令長官東郷平八郎率いる連合艦隊は、遠く海を越えてやってきたロシアバルチック艦隊を撃滅。この戦争の勝敗を決定づけました。しかし、勇ましい戦いの一方、対馬沖は「死の海」に…。

恩海義嶠おんかいぎぎょう（めぐみのうみ ぎはたかし）

上対馬町西泊。殿崎の丘の上にたたずむ記念碑に刻まれたこの言葉に、今回の「つしまさいこう」はスポットをあてます。

対馬沖海戦と西泊

明治38年5月27日、対馬沖。当時世界最強と言われたロシアのバルチック艦隊は、東郷平八郎率いる日本の連合艦隊との交戦の末、敗戦。次々と沈没しました。そのうち、巡洋艦ウラジミール・モノマフ号に乗船していたロシア兵143人は、上対馬町西泊の殿崎海岸（阿奈珥泊）に4隻のボートで漂着。

海岸付近で農作業をしていた2人の女性が進み出て、身振り手振りでお話。水を求めていると知ると近くの井戸に案内しました。



地図は「妣と記念碑」より抜粋

当時を記した伝記集には、ロシア兵上陸の様子が次のように記されています。

「変な舟が阿奈珥泊の浦に入ったがどげん舟じゃろうかと、大勢の里人が阿奈珥泊の浦の上の島の付近に集まった。（中略）一群が小径をちわちわ登ってくる姿を見て漸く警戒体制に変わった。麦を刈る小鎌や草薙鎌をいざというときのために手にしてはいたが、持ったまま恐る恐る後退し始めた。おろおろ声で囁く者。ワツと泣き出し母親にしがみつく子供もいた。（中略）それは日本人ではなかった。痩身で背が高く、落ち窪んだ眼窩。赤茶けた頭髮に赭顔の初めて見る異国の人がまだ十四歳の少女の妣には獣のように見えたのである」

（犬束通著 妣と記念碑より抜粋）
※妣：母親のこと



体や衣類を洗った茂の井戸



ロシア兵が最初に上陸した阿奈珥泊

思いもよらないロシア人との遭遇で、てんやわんやの大騒ぎになった西泊。上陸した143人（実際には沖を漂流していた20数人も加わったといわれています）のロシア兵に、なけなしの米や芋を持ち寄って食事を与え、怪我の手当てを行い、血や油で汚れた服を脱がせて洗濯をし、夜は6軒の家に20数人ずつを分宿させました。翌日、当時海軍の要港部がおかれていた竹敷（美津島町）へと連行される際、ロシア兵達は渾身の

力を振り絞って乗船する4隻のボートの全てのオールを直立させました。それは、權立て（かいたて）という「敬礼」。ロシア兵達の精一杯の感謝の意の表れでした。言葉も通じない異国、ましてやささきまで戦っていた「敵国」での厚いもてなし。遠く海を越え、戦いに敗れて、疲れきっていたロシア兵の心に、その「人間愛」は深く染みいったにちがいありません。大勢の西泊住民も手を振って別れました。



水を欲しがるロシア兵を案内した殿崎の井戸
（当時の場所とは多少位置が異なる）

記念碑の建立

眼前の対馬海峡での日本連合艦隊の偉業をたたえるときにも国境を越えた人間愛があったことを後世に伝えようと海戦から6年後、西泊で若手のリーダーだった比田勝善三郎氏を中心にして8人が世話役となり、記念碑の建立を実現させました。文書類一切は善三郎氏が引受け、中央とのやり取りを行いました。



碑建立の世話役たち
(対馬の100年より)

記念碑に刻まれた「恩海義嶠」の文字は、ロシア兵を救った西泊の人々の心に感銘した連合艦隊司令官東郷平八郎の直筆で贈られた言葉です。月刊「生命の光」編集長の伊藤正明氏は「戦争で死の海となった対馬が恩愛の海となった。その義はなんと気高いものであろうか」と訳しています。

後の明治45年5月24日、念願の碑が序幕されました。

歴史を紐解く

西泊には碑建設に至るまでの資料が『農組』と呼ばれる本戸組織により大切に保管されています。東郷平八郎の筆跡を知る写し、亀谷省軒直筆の碑文、比田勝善三郎に届いた東郷の執事からの手紙、記念碑建立のための会議資料や寄付金台帳など100年前の貴重な文書が残っていました。宝物箱は専用の保管庫に納められ、開封も5人以上の立ち会いがなければ行えないという厳しい取り決めが今も受け継がれています。

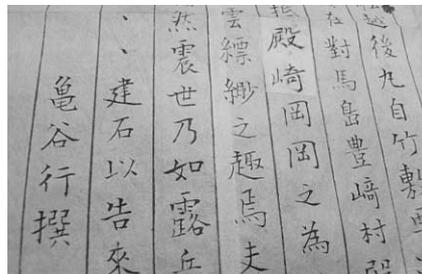


約100年前の古文書が残る宝物箱

この取材では農組長をはじめ地区の方々が温かく協力をしてくださいました。



記念碑建立の寄付台帳



亀谷省軒の撰文による碑文



東郷平八郎の筆跡(写し)

海戦のかたりべ

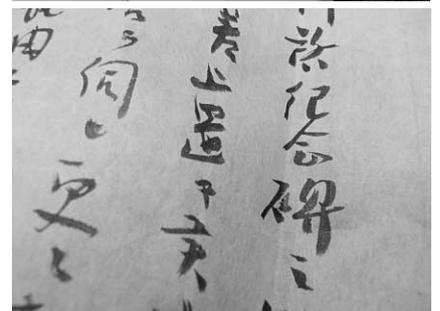
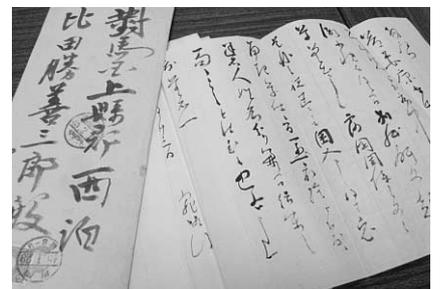


犬東通さん(90歳)

西泊にお住まいの犬東通さんは平成21年11月に伝記集「妣と記念碑」を自費出版しました。犬東さんは現在90歳。「物ごころついた頃は戦後20年が経過していましたが、当時14歳だった母や祖父母からは、食事のたび、人が集まるたびに、生々しくロシア兵が一晩を過ごした出来事が語られていました」と振り返ります。10代の頃からこの史実を記録に残さなければという使命感を抱いていた通少年は、家庭を築いてからも時間をみつければ、家族や地区の古老たちへ聞きとり取材を続けました。そして、念願の伝記集を出版。犬東さんは「かつてこの地で、先輩方が行った世界に誇る美拳を風化させてはならないと思いました。本が完成したときは生涯の仕事をやった気がした」と話します。



500部を無料配布



東郷平八郎の執事からの手紙

時を越えて

「恩海義嶠」の碑は来年2012年5月に建立から1000年を迎えます。長い歳月が経過し、碑の風化も見られるため、西泊では昨年4月に『殿崎記念碑建立百周年記念事業実行委員会』（8名）を立ち上げ、来年5月の完成をめざした新しい記念碑の建立、古文書の読解、Tシャツや100周年のぼり等の作成を計画しています。



来年5月の除幕を目指す平成の世話人たち

また、地域マネージャー制度を活用し、同じくロシア兵上陸地である島根県江津市和木地区を訪問交流を深めています。



ロシア兵上陸地の和木地区を視察

平成の善三郎

実行委員長の犬束俊治いぬづかしゆんじさんは、犬束通さんの甥です。「20代の頃から通さんによく話を聞いていました。6年前に戦後100周年の記念イベントが殿崎で盛大に開かれたことで最大の関心事になり、海戦の歴史とともに、ロシア兵を

手厚くもてなした先人たちの美拳を受け継いでいきたいと思いましたが、碑が建つて来年で100年。歴史的なこの節目に私たちがじつとしてやることはできません。次の100年に繋がる新たな碑ができれば」と来年の序幕を目指します。

地域マネージャーの奮闘

実行委員会をまとめるのは地域マネージャーの古場公章さん。これまで地域マネージャー通信を55回発行し、様々な地域情報の中で対馬沖海戦と西泊の深い関わりを伝えてきました。通信を通して、

地域内では記念碑100周年への関心が高まっています。古場さんは、99年前、碑建設の世話人だった比田勝善三郎さんの実孫でもあります。「自分の代で100周年が来るのも運命なのか」と話す古場さん。デジカメ片手に地域の宝を探しつづけています。



実行委員長の犬束さん

亡き先人たちが遺した「記念碑」と、今も語り継がれる「人間愛」は、世紀を超えて、西泊の人々の「誇り高き郷土の財産」です。殿崎に建つ碑は、西泊の新たな100年の始まりを静かに見つめています。



地域マネージャーの古場さん